
梓、誕生日、夜にて

不幸男

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

梓、誕生日、夜にて

【Zマーク】

Z4660Y

【作者名】

不幸男

【あらすじ】

中野梓誕生日特別企画です。誕生日前日、こつも以上にこじられたあずにゃんこと中野梓。疲れ果ててベッドへとばたんきゅーしたお話です。夢オチです。夢オチなんです！！（言っちゃった）夢だから何やってもOKだよね？…といつてもそこまでいじることをするわけじゃないです…たぶん。そしてあずにゃん、お誕生日おめでと♪。

(前書き)

いじにちは、不幸男です。

あくにゃん、お誕生日おめでとー

ー田連ごナビ…

「つ、疲れたー」

「……今日一日の事を思って出しながらベッドにダイブする少女が一人。

名前は中野梓。

高校2年生である。

桜高校軽音部所属。

パートはリズムギター。

ツインテールが特徴的な女の子である。

なぜ彼女がここまで疲れているかと言つといつもベタベタとくつついてくる唯はもちろん他の部員（主に紬と律）までもがやたら部活中に絡んできたからだ。

唯いわく、

「今日はあずにゃん、16歳最後の日なんだよー記念日だよー16歳といつ日は一度と戻らなくなるんだよー」

だそうだ。

実際は明日が梓の誕生日なので明日が記念日なのだが唯の中では前

田の日に数えられたものである。

もつとも誰にいってみれば毎日が記念日なのかもしれないが、

（うーん。律先輩やムギ先輩はいいとして唯先輩はもう少しうにかならないかなあ。ひつつかれるのはいやじゃないけどさすがに毎日は疲れるよ…まずは…唯、先輩に…大人になつて…もつて…それから…それから…）

結局、考えがまとまらないうちに梓のまぶたは重く閉ぢられてしまつた。

「梓、おいでばー。」

「は、はい！」

「なにボーッとしてんだ？」

梓が目を開けると田の前には律がいた。

律は梓が田覚めたことを確認すると再び前を向く。

一体何が起つたのか？

梓は状況がつかめないでいた。

周りの景色を見ても全く見覚えがない。

そして梓は周りを見渡して初めて自分が今、エスカレーター的なもの上にいることに気づいた。

（あれ…？なんで私こんなところに居るんだっけ？確か今までベッドの上にいたような…）

2人の周りには見たことも無い機械たちがいそそと作業を行っている。

「いえ。すいません。あの、律先輩、それでどこに向かってるんですか？」

「ん~、ついてからのお楽しみだ！」

正直言つて律がこんな態度をとつた時は基本、あんまりお楽しみになれない状況下におかれることが多かったので不安で仕方ない梓だったが、律が決して口を割らない事も理解していたので梓は正直に律のあとをついていった。

ついていった、と言つても地面が勝手に動いてくれるので梓は立つているだけでよかつたのだが。

「おっしゃるだーー！」

扉の前で急に地面が進行をやめた。

「ちゅうちゅう、待つてくれよお……おじ、元了ー。」

律が扉の横にあつた映画でよく見るパスワードを打つパネルみたいなのに番号を打ち込むと扉はペーーと甲高い音を発し、中へと通してくれた。

律と一緒に扉の中へとおそれおそれ入つていこうと中には暗闇が広がつていた。

暗闇。

圧倒的暗闇。

まさに一寸先は闇と言つたところだつた。

両方の意味で。

「り、律先輩。こいつて何なんですか？ そろそろ答えてもらつても

…

「おつとーそれを説明するのは私じゃないぜー。」

「遅かつたわね、梓ちゃん」

突然、聞きなれた声がマイク越しで聞こえた。

その声と同時に斜め上方にだけ明かりがつく。

「あ、さわ子先生！？」

前方にある建物らしきものの中に桜高軽音部の顧問であるさわ子の姿があった。

そして彼女はなぜかサングラスをかけ、白い手袋をはめ、ビニールの司令のような格好をしていた。

「待っていたわよ、梓ちゃん。いや初号機バイロット中野梓！」

「へ？」

さわ子はビシツと決めたつもりだろうが梓にはなんの事だか全くわからなかつた。

「いい？ 現在、この町は使徒という存在に襲われているわ

さわ子が指をならすと梓の目の前に画面が現れた。

「そこ」に映っているのが使徒よ

「いや、あの…」

梓が幾ら目を凝らしてもそこには同じクラスの鈴木純の姿しか見当たらなかつた。

純はプラモデルのような町を盛大に壊して遊んでいる。

「純しか映つてないんですけど

「違うわ。それは第三の使徒ジュン・ジュワリエルよ

「ジュン・ジュワリエルー？」

「そのジュン・ジュワリエルを倒すためにあなたにはエヴァンゲリヨン号機に乗つてもいいわ」

そう言つてわ子はもう一度指をならした。

すると部屋が光につつまれてこの部屋の全貌が明らかになる。

まず間違いから正すとそこには部屋ではなかつた。

何かを保管しておいたものよりも広く、天井はみえない。

中は梓が考えていたものよりも広く、天井はみえない。

壁にはレールのようなものが走つており真つ直ぐと上方へのびていた。

まるで何か大きなものを運ぶために、いや何か大きなものを発進させるために。

そしてきっとその何かに当たるであろうものがそのレールにつながれていた。

こここの物は一度も見たことがないような物ばかりだったがその者だけは違つた。

「これって唯先輩じゃないですか！……」

「違つわ、それはヱヴァンゲリヲン初号機よ。私が心血注いで作り上げた最高傑作である、ね」

「大体、なんでこんな巨大化してるんですか？意味が分かりません！」

「さあ、梓ちゃん。」この唯ちゃん、初号機に乗つてジュンジュワーを倒しに行くよ！――「」

「行きません！――それに今、絶対唯ちゃんって言いましたよね！――あと使徒の名前変わつてます！」

「いちいち細かいところばかり気にするわね……行くの？行かないの？」

「だから行きません！――なんで私が行かなきやいけないんですか！――」

「ん～しあうがないわね……ムギちゃん、彼女を」

さわ子は横にある画面に話しかける。

すると画面の向こうに紺の姿が現れた。

「出せますかね、先生」

「死んでいるわけではないわ」

しばらく間、梓がさわ子に文句を言つていると一人の少女が寝台に乗せられ運び込まれてきた。

「大体、先生はいつもいつもお茶ばかりのんで……少しばかりのんびりしててあ
れ？」

梓がその寝台に気付く。

すれ違いざまに寝台の上の少女を覗き込むとそこには膝を抱えてひたすら何かを言つてゐる少女の姿があった。

といふか零だつた。

「あなたが乗らないなら彼女を乗せるまでよ」

さわ子が冷たく言い放った言葉に梓は胸のあたりが痛むのを感じた。

「澪はな、この前、初号機にお化けがでたとか言つてな。それ以降初号機に乗れなくなつてしまつたんだ」

後ろから律が心配そうに澪を見ながら語り始める。

「え？」

「だからやむなく他のパイロットを探したんだ。でも初号機に会つ

適合者がなかなか見つからなくてな。ようやく見つかったのが梓、お前なんだ」

「でも……」

「大丈夫。お前なら出来る……」

「でも私こんな見たことも聞いたこともないですし、出来るわけないです……」

「じゃあこのまま……澪が苦しみながらも初号機に乗る」とが一番いい」とだと思つのか?」

「それは……思い、ませんけど」

「お前に今できる」とは何か、何をやらなくちゃいけないのか、もう一度考えるんだ」

「のままでは澪がもつと苦しむのは紛れもない事実……

私が初号機に乗れば澪先輩が苦しまなくて済むのもわかつてゐる。

(そんな簡単なことわかつてゐるのになんで……なんで私はためらつてるんだ!! いつもの私なら絶対澪先輩を苦しませたりしない!! 戻つてこい!! いつもの私!!)

カムバック私カムバック私カムバック私カムバック私カムバック私
カムバック私カムバック私カムバック私カムバック私カムバック私
カムバック私カムバック私カムバック私カムバック私カムバック私
カムバック私カムバック私カムバック私カムバック私

カムバツク私カムバツク私カムバツク私カムバツク私カムバツク私カムバツク私カムバツク私カムバツク私カムバツク私カムバツク私カムバツク私カムバツク私

「私、乗ります！…乗らせてください…！」

「あ、そう？乗ってくれる？はーいじゃあ澪ちゃんは病室に戻していいわよ~」

さわ子が撤収の号令を出すとすぐさま寝台は病室へと戻つていった。

「よーし、梓。これを着るんだ」

律が梓に布の塊を手渡す。

「なんですか？これ…メイド服みたいで…けど」

「それはプラグースーツと言つてな、初号機とのシンクロを補助してくれるんだ」

「じゃあこれはなんですか？猫耳みたいなんですけど…」

「それはインターフェイス・ヘッジセシートとつてな初号機との神経接続に欠かせないアイテムなんだ」

とりあえず更衣室に通され、素直に着替える梓。

「あの…着替えたんですけどこれって猫耳メイドですよね？」

着替え終わつてさつきの場所に戻るとさわ子と律が待つていた。

「せうともこうな

「うん……完璧よ……よへんじ今までの適合者を連れてきたわね！
！」

鼻息荒く興奮氣味のさわ子。

「さわちゃん、私をなめていらっしゃー困る……梓は下手したら
澪よりも猫耳が似合つかもしけなこと」私の見たては完璧だった
ぜーーー！」

得意げに語る律のおでこはこつも以上に輝いていた。ひだりみゆうだつた。

「それにしておもしろいにシンクロ率ですね、さわ子先生。これならど
こに出してでもいいですね」

いつのまにか現れた紬が会話に参加する。

「そうね……それじゃあ、梓ちゃん。まず猫のポーズで一やーーても
つてみて」

「こや、こやーーー

「完璧よ……私が教えることはもうないわ……

「な、なんなんですか、これ

「何つて、猫耳メイドだけじ？」

「だから……なんで猫耳メイドなんですか……」

「それは……猫耳メイドだからよ……」

「私はそんなじょうもない答えを期待していたわけではありません……」

「だったらなんなのよ……」

「なんで初号機に乗るのにこんなひらひらの服で、しかも猫耳で乗らなきゃいけないんですか……！」

「だつて可愛い方がいいじゃない……」

「それはそうですが、私は恥ずかしいです……」

通常のメイド服より明らかに丈の短いスカートに手を押しあて激昂する梓。

「ちなみに初号機での戦闘時は中の梓ちゃんの姿は360度、全方位からのカメラでモニタリングされ全世界に配信されるわ」

「いやです……せつぱり私、絶対乗りません……」

「そんなこと言つていいと思つてこるの?」

「私たちがそれを許すとでも?」

「『』めんね梓ちゃん」

三人がじつじりと梓に詰め寄る。

「ちよ、先輩がた？顔が怖いですよ…？」

「つつかやん、ムギちゃん…！梓ひやんをとらえなさい…！」

「あいあこやー」

「ちよ、ちやつとーー！あああああああ

ガタンとベッドから落ちる梓。

時計を見る。

時刻は11月11日6時半。

いつもより少し早い起床だった。

「ゆ、夢かあ…」

17歳初めての朝の気分は最悪だった。

今日は厄日だな

そんな事を思いながら梓は学校へ行く準備を始めた。

しかし彼女はまだ知らない。

部室で唯たちが梓の誕生日会を盛大に開いてくれる事を。

そして誕生日プレゼントと称してさわ子が猫耳メイドの衣装を作っている事を。

(後書き)

111まで読んでいただきありがとうございます。

実は初短編です。

短くまとめるのって難しいですね…

しかし、あくまで、このたまに、ならえんやー、らいー、という勢いで書きはじ
た。

そして実は私は唯ちゃん派です。

よかつたら他の作品も読んでいただけると嬉しいです。（宣伝）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4660y/>

梓、誕生日、夜にて

2011年11月17日17時32分発行